カール先生指導によるアーバイン家庭集会
2014年6月24日

“The Good Samaritan” Luke 10:25-37
「善いサマリア人」　ルカによる福音書10章25節から37節

ルカの福音書では、「discipleship: 弟子である事」が大きな主題となっている。では「弟子」の定義は何だろうか？　古代の人達は、先ず弟子というのは先生から物事を学ぶ生徒である、と考えた。次に一歩進んで、弟子とは、ただ学ぶだけではなく、その教えを受け入れて先生（ラビ）に従って行く者達だ、と考えた。それからもっと進むと、イエスの弟子達は、ただイエスに従うのではなく、イエスのように成りたい、ご自分の命を犠牲にされた自分たちの先生と同じような者になりたい、と願い行動するようになる。

この「善いサマリア人」の話は有名な話である。生活の様々な場面で「善いサマリア人みたいに」と例えに使われている。今日はその有名な譬え話を様々な角度から読んで行きたいと思う。先ず、この話の設置は、ルカの福音書10章の25節から29節に書かれている律法の専門家とイエスの会話から始まっている。この律法学者は、ユダヤ人である。あの時代のユダヤ人は、永遠の命を信じていないから、彼が聞いた「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐ事ができるでしょうか？」、という質問は、実際は、「どうすれば健康で、豊かな人生を送れるか？」と言う意味なのであろう。それに対してイエスが「律法にはなんと書いてあるか？」と聞くと、この律法学者は、「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」そう答えた。イエスはそれに対して「正しい答えだ、そのとおりに実行すれば命が得られる」と言われた。それに対して、この律法学者は、また質問をする、「では、私の隣人とは誰ですか？」。彼のこの質問が「善いサマリア人」の譬え話しのきっかけとなるわけである。

私たちにとって、「隣人」とは誰のことだろうか？　友達、家族、身近な人達、それらの人達を大切にする事は難しい事ではない。ところが、イエスの愛は限りないから、「隣人」とは全ての人類を指しているのである。イエスの「隣人」に境はない。この譬え話しから、それが明らかに理解できる。

律法学者の質問に、イエスはこの譬え話しをする事によってお答えになっている。私たちが良く知っている「善きサマリア人」の話は簡単である．まず、ある人が追いはぎに襲われて半殺しの目にあい、道端に置き去りにされる。そこに最初に通りがかったのが祭司だったが、その人を見ると道の向こう側を通って行ってしまう。次に通りかかったのがレビ人で、これも同じようにその人を見ると道の向こう側を通って行ってしまう。次に通りかかったのが、旅の途中のサマリア人で、彼はその人を見ると憐に思い、傷の手当をしてから、自分のロバに乗せて宿屋に連れて行って介抱した。しかも、宿屋の主人にお金を渡して、足りなかったら帰りがけに払うからこの人を介抱して下さいと頼む。話し終わった後で、イエスは

律法学者に聞く、「この三人の中でだれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法学者は「その人を助けた人です。」と答える。イエスは「行ってあなたも同じようにしなさい。」と彼に言う。簡単な譬え話である。

しかし、実はちっとも簡単ではないのだ。先ず、最初に通りがかった祭司は何人か？ユダヤ人なのだ。彼は、多分半殺しになって気を失っている人を見て、死んでいるかもしれないと思ったに違いない。ユダヤ人の祭司は、人を助けるのが役目でありながら、律法によって、死人に触れては行けない事が決められている。だから、助けたくないのではなくて、律法によってできなかったのである。次のレビ人もユダヤ人である。彼の職務は所謂祭司のアシスタントなので、彼もまた死人に触れる事は禁じられていた。だから通り過ぎて行くよりほか無かったのだ。そしてこの半殺しの目に会って道に横たわっていた男は何人か？彼もユダヤ人であった。お互いがユダヤ人同士でありながらも、彼らの伝統習慣、そして法律によってこのように助け合う事が必要は状態にありながら、それが出来ない、このような人を隣人と呼べる訳がないではないか、と思ってしまう。最後に通りがかったのが旅人のサマリア人だった。サマリア人というのは、ユダヤ人から最も嫌われていた人種で、サマリア人という言葉を口にもしたくない程、この人達を拒絶していた。それほどまでにユダヤ人に嫌われているサマリア人が、半殺しの目にあって倒れていたユダヤ人を懇切丁寧に介抱したのだ。考えられない程の隣人愛ではないだろうか。同時に考えられる事は、半殺しの目にあったユダヤ人の男も、自分が瀕死の状態にあってこそ、普段なら見向きもしないサマリア人の介抱を受けたのかもしれない。気を失っていたから、介抱してくれている相手が、サマリア人とは分からなかったのだろう。もし分かったていたら、素直にありがたくサマリア人の介抱を受けただろうか？　例えば、あなたが離婚して何年も経ってから、肝臓の病になり、肝臓移植をするのに、あなたが離婚した相手の肝臓が一番適していると分かった時、あなたは離婚した相手に救いを求めるだろうか？　反対に、離婚した相手が救いの手を述べて来たら、あなたは素直に受ける事ができるだろうか？

さらに私たちが忘れてならない事は、イエスもサマリア人と同じような存在だったということだ。ユダヤ人でありながらも、ユダヤ人の律法などに関わり無く、イエスは分け隔てなく人を癒し、愛し、永遠の命を語り続けた。私たちを罪から救い、助けて下さるイエスが差し伸べている手を、私たちはありがたく素直に受け入れているだろうか？　そしてさらに、私たちがイエスを受け入れ、弟子としてイエスの後に従い、少しでもイエスに近づけるように成る為には、ただ人助けをするだけではなく、“キリストの救い”を伝えて行く事なのではないだろうか。それがイエスの弟子としての使命ではないだろうか？

若し私がイエスに質問した律法学者だとして、イエスに「行って同じようにしなさい。」と言われたら、私もサマリア人の様になれるだろうか？それ以上に、“キリストの救い”を伝える事ができるだろうか？　考えれば考える程自分の不完全さと、弟子と呼ばれるにはあまりにもほど遠い自分を覚えずにはいられない。先ずはイエスの助けをありがたく素直に受け入れる事から始まり、一歩一歩イエスに従い前進していかなければ。